

論文 (Article)

在日ブラジル人高校生・大学生の言語生活と アイデンティティ¹

Language life and the identity of Brazilian university
and high school students

重松 由美
Yoshimi Shigematsu*

1. はじめに

1990年の出入国管理法の改正により在日ブラジル人の数が急激に増加してから20年以上がたった今、彼らの日本滞在の長期化もしくは定住化がすすんでいる²。入国管理局が2011年7月に発表した外国人登録統計によると、2007年12月末316,967人いた在日ブラジル人の数は、リーマンショック後の経済危機の影響やその救済策として厚生労働省が実施した帰国支援事業³を利用した帰国者の増加、そして西日本大地震後の生活への不安感から2011年6月末では221,217人まで減少した。しかし言い換えれば、22万人のブラジル人が、経済危機や震災を背景に、日本で暮らすことを選択したといえる。

経済危機後は、親の再就職や経済的な問題で不就学となる子どもへの対応など、新たな問題が深刻化するなかで、教育面では行政⁴やNPOによる日本語教育支援⁵やプレスクール事業などが実施されている。このような問題に注目が集まる一方で、日本の高等学校や大学に入学する子どもの数が増えてきており、在日ブラジル人の間にも階層分化が進んでいることがわかる。外国人の公立中学校卒業生の高校進学率のデータをとる自治体が少ない中で、豊橋市は79.5% (2008年)と発表し、可児市では53.3% (2007年)、56.7% (2008年)、79.1% (2009年)と年々上がってきている。

ブラジル人の子どもたちの中で、ポルトガル語よりも日本語を得意とする、もしくはポルトガル語は理解できるが話せないというケースが増えてきている。母語教育への取り組みが進まない中、ポルトガル語を話せない子どもが増えていくことは容易に理解できる。通常、移民による言語シフトは三世代を経ると完了するといわれている。このような現状において、在日一世・二世の言語使用に関する資料は大変貴重なものとなる。

在日ブラジル人の言語運用は話者の社会的背景により多様化している。本稿では、バイリンガルを中心とした高校生と大学生によるポルトガル語と日本語の言語混用の実態を紹介するとともに、彼らのアイデンティティと言語混用に対する意識との関係について考察する。

2. 調査対象者と方法

本調査対象者は岐阜県美濃加茂市と愛知県知立市在住の高校生と大学生である。両市とも住民の約1割が外国人であることなどから⁷、多文化共生事業にも積極的に取り組んでいる。このような集住地域で生活している彼らは、コミュニティの互助機能、学校での加配教員による日本語指導やブラジル人語学相談員を通じての教育相談や就学支援、そして公共機関やNPO主催の母語教室や母国文化理解講座などを享受でき、ブラジル人としてのアイデンティティを保持していきながら日本社会で生きていくことが可能な、恵まれた環境にあるといえる。

調査方法は、言語使用とアイデンティティに関するアンケートとインタビューである。調査は、知立市では平成22年11月～平成23年1月にかけて、美濃加茂市では平成23年8月におこなった。アンケートは日本語とポルトガル語のものを用意し、好きなほうに記入してもらった。インタビューは、喫茶店で行いリラックスできる環境を作ることに努めた。インタビューのテーマは特に決めずに、初めにアンケートの回答について詳しく質問し、その都度出てきた話題に合わせて話を進めた。所要時間は約1時間である。

調査対象者は高校生17人（1年生5人、2年生7人、3年生4人、4年生1人）と大学生5人（1年生1人、2年生3人、3年生1人）の計22人である。男女比は、高校生は男性9人、女性8人であり、大学生は男性1人、女性4人である。来日時の年齢は、2歳2人、3歳1人、5歳2人、7歳5人、9歳1人、10歳3人、11歳1人であり、日本生まれは7人いる。滞日年数の平均は約12年となる。次に転校回数についてであるが、先行研究（小内2003、佐久間2006）から、ブラジル人児童生徒が親の仕事の都合によりブラジル人学校間や日本の公立学校への転校を繰り返すことや、日本とブラジルを行き来することにより学習の継続性を保つことができていないことが分かっている。調査対象者の転校回数は、公立学校間1回が6人、2回と3回が各1人、ブラジル学校から公立学校への転校が4人であるが、約半数の10人は転校したことがないと答えている。両市ともブラジル人集住地域であるため近隣にブラジル人学校が存在しているが、親は公立学校を子どもの就学先に選択している。この親の選択⁸と、転校回数も少なく継続的に学習できていたことが、高等学校もしくは大学進学につながった理由のひとつといえる。

2.1. 言語生活

ブラジル人高校生と大学生の言語能力を紹介する。図1で日本語とポルトガル語の言語能力を比較すると、多くのものはバイリンガルであると自己評価しているが、やや日本語能力のほう勝っていることがわかる。言語別に見てみると、調査対象者全員は日本語の能力が日常会話レベル以上である。3技能のうち「読む力」と「書く力」が「話す力」と比べやや低いが、これは漢字習得の困難さが起因している。一方ポル

トガル語に関しては、日常会話レベルの能力を持っていないものもいた。日本の教育機関のみで教育を受けてきたこと、母語教育の環境が現在と比べ整っていなかったこと、そして保護者が家庭でポルトガル語を教える時間的・精神的余裕がないことが影響していると考えられる。また、「書く力」が他の2技能と比べやや低いのは、スペリングの教育を受けていないためである。ブラジル人学校の国語教師の話でも、話し言葉の影響が書き言葉に反映されているという話をよく耳にする。

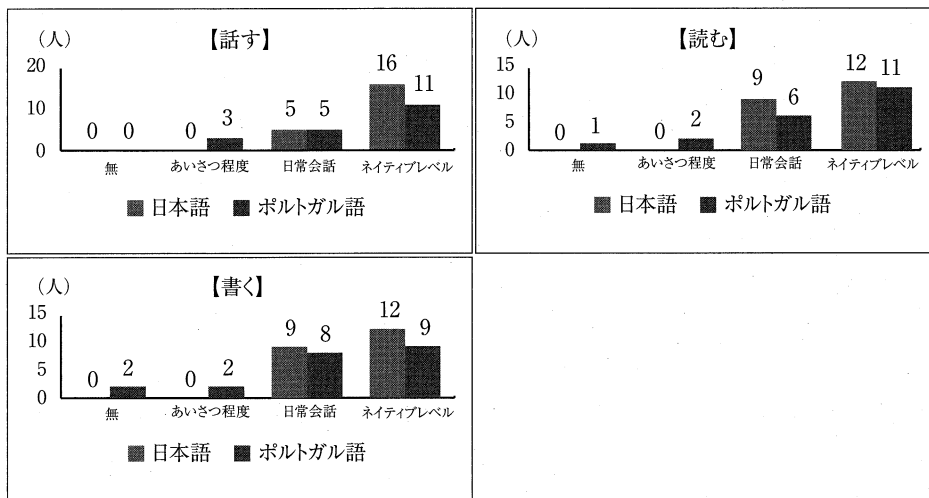


図 1 3技能別言語能力

2.2. ポルトガル語学習方法

日本の教育機関で教育を受けてきたブラジル人の若者はどのようにポルトガル語を習得もしくはその能力を維持しているのか。アンケート項目「ポルトガル語を習得・保持・上達させるために何かしていますか。」の結果は、「している」が13人、「していない」が8人であった。「していない」学生のポルトガル語能力は低いものが多かった。次に、学習方法に関する回答を以下に紹介する。

- ・「家庭内でポルトガル語を使う」10人
- ・「ブラジル人の友だちと話す」6人
- ・「ポルトガル語の語学学校へ通う」4人
- ・「ポルトガル語のテレビ番組や映画を見る、新聞・本を読む」5人
- ・「ポルトガル語を話せる活動に参加する」3人

「ポルトガル語の語学学校へ通う」と答えた4人は、全員美濃加茂市在住であり、NPO 法人が開講している教室に通っている。この教室は毎週土曜日の午前中に開講され、ブラジルの初等教育で採用されている教科書を使っている。対象者たちは小学校3年生レベルのもので学んでいる。その他の学生の学習方法をみると、母語保持や習得のためというより「容易」で「自然な」コミュニケーション手段（塚原

2010) であり、このような環境で彼らのポルトガル語能力を上達させることは難しい。先に挙げたポルトガル語能力が日本語能力に劣る理由の一つには、母語教育を家庭にゆだねられない現状があるといえる。次に、ポルトガル語の学習目的を挙げる。

- ・「親とコミュニケーションをとるため」9人
- ・「ブラジル人としてのアイデンティティを確立させるため」6人
- ・「ブラジルへの帰国を考えているため」4人
- ・その他「覚えたほうが良いと思った」、「言語を維持するため」各1人

この結果からブラジル人の若者にとってポルトガル語学習の目的に2つの傾向があることが読み取れる。すなわち、母語継承としての部分と、その他の回答にあるようにポルトガル語習得をひとつのスキルとして捉えている、つまり第二言語習得としての部分が現れてきている。

2.3. 使用言語

ブラジル人の若者は相手により言語をどのように使い分けているのか。表1から彼らが日常生活において二言語を併用していることがわかる。言語選択の決定要因の一つに話し相手の言語能力があるが、両親に対してポルトガル語の使用割合が高く、兄弟や友人と話す際は日本語の使用度が高くなっているのは、この理由によるものである。

表 1 相手別使用言語

	P 語のみ	P 語＞J 語	P 語＝J 語	P 語＜J 語	J 語のみ
父親	50%	27%	4.5%	14%	4.5%
母親	54.4%	23%	9%	9%	4.5%
兄弟	15%	25%	25%	20%	15%
ブラジル人の友人	9%	27%	27%	18.5%	18.5%

(P 語はポルトガル語、J 語は日本語を示す)

話しことば以外での使用言語の割合をについてアンケート項目：「何語の本・雑誌を読んでいますか【本】」、「ブラジル人の友人に何語でメールを書いていますか【メール】」、「どの国のテレビを見ていますか【TV】」、「どの国の音楽を聞いていますか【音楽】」の結果を紹介する（表2）。

表 2 話し言葉以外での使用言語

	ポルトガル語	日本語	その他の言語／国
【本】	31%	62%	2%（英語）
【メール】	48%	55%	3%（英語、スペイン語）
【TV】	13%	77%	10%（アメリカ）
【音楽】	25%	37%	39%（アメリカ、イギリス、韓国など）

使用言語の割合が大きく違う媒体、すなわち日本語で利用される割合の高いものは

「本」と「TV」である。活字媒体⁹に関しては、ポルトガル語の本や雑誌の入手の困難さや価格の高さがひとつの理由として考えられる。また、彼らが読んでいるものは、雑誌、とりわけファッション雑誌やゴシップ記事であり、ポルトガル語の語彙数を増やし言語能力を向上させるため、もしくはブラジルの社会情勢を知るための活用はほとんどない。放送メディアについては、有料放送を契約している家庭が多い中でもポルトガル語の使用割合がかなり低い。インタビューでは、積極的に視聴するというよりも親が見ている番組を何気なく見ている程度であるという声が多く聞かれた。つまり、ブラジル人の若者は日本語メディアを通じて情報を得ており、そして、彼らのポルトガル語メディアの利用状況からは資本として活用できるレベルまでポルトガル語能力を高めることやバイカルチュラルな人材となるために知識を得ようとする姿勢は見えてこない。

ここで大学生の意見を個別に見ていくことにする。ひとり、*「ブラジルの TV 番組を見て流行している曲やファッション、そしてブラジル文化・歴史に関する知識を得る。」*とコメントしている。日本で生まれ育ち、一度もブラジルへ行ったことのない彼らがブラジル人というアイデンティティを構築するうえで、TV はひとつのツールとなっているといえる。もうひとり、ブラジルにいる大学生の友人たちと、世界情勢や環境問題についてポルトガル語で議論できるように、専門用語や新語を入手するためにインターネットを利用しているという。このように大学生のバイカルチュラル志向への意識は高く、この点が高校生との違いのひとつであった。

3. 言語混用の実態と言語意識

3.1. 言語変異

ポルトガル語と日本語の言語接触は、時間の経過とともに在日ブラジル人の言語運用に変化・多様化をもたらしている。出稼ぎが始まった当初はポルトガル語に日本語の語彙が取り込まれ、特に文化的借用や職場で用いられる用語が借用された。しかし言語接触が長期化するなかで、日本語がポルトガル語に音声的、形態的、統語的に統合された混種語が現れ、そして日本語能力の高いブラジル人の間ではポルトガル語が日本語に統合された表現が誕生している。

a) <A>: ポルトガル語が上手になるために何かしてる。

: してません。

<C>: ママが português しゃべるから。

: なるべくあっちが português でしゃべって、こっちも português で *reponde* してほしいって気持ちもあると思うんですが、日本語でしか言わない。

【ポルトガル語教室にて：<A> 筆者 姉（12 才） <C> 妹（5 歳）】

a) の “*reponde* して” 「答えて」は、ポルトガル語の活用形（動詞 *responder* の直

説法現在 3 人称単数) responde と日本語「-する」の形態素が結合し、新たな単語を作り上げている。この手法は、移民言語によく見られる事例である。

また、在日ブラジル人が使用する日本語借用語に意味的な広がりや、ポルトガル語の文法規則に従った形容詞の名詞化などの変容が認められている。b) で使用されている「ハガキ」は、ポルトガル語の *cartão postal* では表現できない無地のものを意味するために借用されている。さらに「ハガキ」は、公的機関から送られてきたものに限られるが *envelope* 「封筒」の意味でも用いられている。c) の *gohan* は「お米」と「(炊いた) ご飯」の意味で用いられている。d) では、形容詞 *isogashi* 「忙しい」がポルトガル語の男性定冠詞 *o* の付与により、名詞化している。また、この会話はブラジルへ帰国したブラジル人同士によるものであることから、ブラジルにおいて日本語とポルトガル語の混用が継続されていることがわかる。

a) Hoje chegou o ハガキ da prefeitura. 「今日、市役所から手紙 (封筒のもの) が届いたよ。)

b) Vou comprar *gohan*. 「私はお米を買います。」

c) Vamos comer *gohan* no shokudo. 「食堂でご飯を食べましょう。」

d) <A>:Oi, genki? 「やあ、元気?」

:*Genki*, e você? 「元気、君は?」

<A>:OK! Tem notícia do *Nihon*? 「OK! 日本の情報はあは?」

:Sim, e parece que ainda está *hima*! 「はい、まだ暇みたい。」

<A>:Não vejo a hora de começar o *isogashi* e ir pra lá. 「忙しさは始まってもないし、あっちへ行く時期でもない。」

:Sem zangyo, não dá. 「残業なしでは、やっていけない。」

【ブラジル・サンパウロの日本語教室での会話：<A>、 とも在日経験のあるブラジル人成人】

Nakagawa (2010) では、カエルプロジェクト¹⁰ (日本からのブラジル人帰国子弟に向けた心理的、社会的、教育的支援、そして補習などを目的とした学校への編入援助プロジェクト) での聞き取り調査の結果として、インタビューをおこなった児童生徒たちに共通した言語的特徴として、決まった単語を日本語でしか話さないこと、さらには、「自分は日本語を話せない」と答えた児童生徒までもが気付かずに使っていることに言及している。それらの単語は “*dekassegues*” 「デカセギ語」と名付けられており、リストアップされたものは以下のとおりである：*gomen* 「ごめん」、*onégai* 「お願い」、*kotai* 「交替」、*yakin* 「夜勤」、*hirukin* 「昼勤」、*shatyou* 「社長」、*keitai* 「携帯 (電話)」、*depaato* 「デパート」、*zangyô* 「残業」、*arubaito* もしくは *baito* 「アルバイト」、*kensa* 「検査」、*pachinko* 「パチンコ」、*daiyoubu* 「大丈夫」、*sôji* 「掃除」、*arigatou* 「ありがとう」、*kibishii* 「厳しい」、*gohan* 「ご飯、お米」、*bentô* 「弁当」。これらの日本語借用語は、使用頻度の高さからコミュニティでの定着度は非常に高く、在日ブラジル人の心的レキシコンの一部になっている。そのため、特に若年層の間ではポルトガル

語として認識されている事例も多くある。

3.2. 言語意識とアイデンティティ

個々の言語変種には何らかのイメージを伴うことがある。話し手の個性や属性など、ことばの意味が担う以上の情報を聞き手に伝えているのである。このようなことばのもつイメージは、話し手のアイデンティティと連動しつつ、ことばが選択される過程において大きな役割を果たす。

そこで、ポルトガル語と日本語の混用についての言語意識を取り上げる。アンケート結果は、言語混用を「良いと思う」が6人、「悪いと思う」が4人、そして「何も思わない」12人であった。その理由としては、「気付かずに使っている」14人、「言語の習得を妨げる」3人、「便利である」2人、「言語能力が中途半端な気がして恥ずかしい」、「その他（わからないときがある、言葉を忘れてしまう）」各1人で、「仲間意識をえるため」や「二言語を話せることをアピールするため」を選択したものはいなかった。無意識に日本語を借用する理由は、心的レキシコンとなっている語を使用しているためであると理解できるが、では便利であることやポルトガル語の単語を知らないための代用のような実用的な理由以外に言語を混用することはないのか。ここで言語混用についてのコメントやその実例を挙げる。ブラジル人コミュニティで極めて定着度の高い借用語“*daijyobu*”「大丈夫」について、「“*daijyobu*”を使って相手に通じなかったら、ポルトガル語だけで話す」というコメントがあった。つまり、“*daijyobu*”が通じれば、言語規範を共有しているグループのメンバーであることがわかり、言語混用により仲間意識を示すことができるのである。次に、教師をしている母親が理不尽な保護者の行動に困っていると話しているときに、娘が創作した混種語を紹介する。

f) “Por que você não *ketobashitou*? 「どうして、蹴っ飛ばさなかったの。」

ketobashitou は、「蹴っ飛ばした」とポルトガル語の動詞の活用語尾である -ar が統合し、それが直説法3人称過去形に活用した語形である。この混種語を使用した意図として、「保護者に対する腹立ちを強調するため」であると説明してくれた。このように、言語混用はひとつの表現手段として意図的に使用されている例もある。

次に言語意識とアイデンティティの関係をみてみると、言語混用を「良いと思う」と回答した学生のアイデンティティの割合を平均すると「ブラジル人 68.3%、日本人 31.7%」であり、「悪いと思う」と答えたものは「ブラジル人 82.5%、日本人 17.5%」、そして「何も思わない」は「ブラジル人 69.7%、日本人 30.3%」であった。この結果から、言語混用に対して否定的な学生はブラジル人としてのアイデンティティをもっとも強く認識しており、否定も肯定もしていないもの、そして肯定的に評価したものの順にブラジル人としてのアイデンティティが弱くなっていることがわかる。つまり、ブラジル人としてのアイデンティティが強くなるほど、言語混用に対する抵抗感が強くなっている。前述のとおり、自分の用いる言語や変種が、そのアイデンティティ

を確認するのに重要な役割を担うことがある。言語混用を否定的に評価した学生4人は「ポルトガル語を話すときにポルトガル語で分からない単語があるときのみ日本語を混ぜる」と答えており、「ブラジル人」への帰属性が強い彼らはポルトガル語の「純粋性」への思いも強く、「正しい」ポルトガル語を話すことによってブラジル人としてのアイデンティティを確認しているのではないかと考える。

では、ブラジル人としてのアイデンティティの形成に関与する属性とはどのようなものであるか。本調査では、来日年齢が低く、滞日年数が長いほど、日本人としてのアイデンティティへの意識が高いことが認められた。そしてもうひとつ、「将来の居住国」の選択においてアイデンティティの形成過程を見ることができた。ブラジル人としてのアイデンティティを強くもつ学生は、将来日本以外の国に住もうと考えており、また無回答が多かったことから、現在の生活に迷いをもっているものが少なくないことがわかった。「カナダ」を選んだ学生は「外国人に慣れていて、差別しないから」とコメントしている。これは、「日本人は差別する」ということを訴えており、同じコメントが「日本人の良い点と悪い点を書いてください」という項目で多く確認されている。また、インタビュー中に、筆者が「自分のアイデンティティは100%ブラジル人である」と答えた大学生に対して日本で育った経験がアイデンティティに全く反映されていないことに疑問に思い、この点を確認してみたところ、「日本にいるときは、私はブラジル人です。」という条件付のアイデンティティ評価であることがわかった。彼女は、小さい時はブラジル人であることも人前でポルトガル語を話すことも嫌だったが、NPOが主催する勉強会に参加したり、他の国籍の日系人グループとの交流を通して、ブラジル人であることに誇りを持ち始めたという。そのため、将来日本で生活するつもりだがブラジルの国籍は続けると決めている。

一方、自己アイデンティティの半分以上は日本人であると評価している若者は、将来の居住国として日本を選んでおり、「日本でのほうが将来が見えているから」、「慣れているから」、「環境がいいから」、「いい国だから」のコメントからわかるように日本での現在の生活を大切に思っている。そのため、「日本」に依拠したアイデンティティ形成のほうが、母語への言語アイデンティティよりも重要であると考えているのである。彼らが、便利でさらに感情を豊かに表現できる言語混用を許容するのは自然なことである。このように、アイデンティティは他者との関係や現状の満足度を通じて認識され、その結果が言語意識や将来の居住国に現れている。

4. まとめ

ブラジル人集住地域に住み、日本の高校・大学へ進学した本調査対象者たちには、バイリンガル・バイカルチュラルな人材としての可能性がある。しかし実際には、ポルトガル語能力もブラジルに関する知識も資本として活用するレベルには至っておらず、またそのために努力する姿は見えてこなかった。

そして、アイデンティティと言語意識の関係からは、ブラジル人としてのアイデンティティを強くもつ若者は、言語混用をすべきではないと考え、そして将来は日本以外の国に住むつもりであるという傾向が示された。この背景には、彼らが日本で生活していても日本人として扱われず、また差別をうけた経験から、アイデンティティの混乱に苦悩している現状がある。この体験が、ブラジル人と深く結び付くポルトガル語への強いこだわりという形となって表れている。

本調査の対象者は日本の高等学校もしくは大学の入試という壁を乗り越えてきており、ブラジルと日本の文化のプラス面とマイナス面を実際に経験し、それをアイデンティティの形成に反映させている。彼らが在日ブラジル人として肯定的に自己評価できるようにするためには、日本社会において成功経験を積み上げていく必要がある。筆者は彼らの活躍を見続けていきたい。

■注

- 1 本稿は、独立法人日本学術振興会平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「スペイン語・ポルトガル語近親言語文化圏間の外国語教育と相互理解の諸相」（課題番号 22520559）の調査報告の一部である。
- 2 入国管理局が 2011 年 8 月に発表した資料によると、在留資格が「永住者」117,760 人、「定住者」77,359 人となっている。
- 3 厚生労働省が実施した在日南米出身者の日系人を対象にした帰国支援事業（2009 年 4 月 1 日～2010 年 3 月 31 日）とは、帰国希望者本人には 30 万円、その扶養家族には 20 万円を支給するものである。そして、「入国制度上の措置として、支援を受けたものは当分の間（3 年間）、同様の身分に基づく在留資格による再入国は認められない」という規制が設けられていた。この事業を利用した国籍別出国者数は、ブラジル人 20,053 人、ペルー人 903 人、その他 719 人であった。
- 4 愛知県では 2008 年に日本語学習支援基金を創設し、経済団体等の協力を得て、日本語教室やブラジル人学校への助成をおこなっている。
- 5 公立小・中・高等学校・特別支援学校等に在籍する外国人児童生徒数は 75,043 人であり、日本語指導が必要な外国人児童生徒数は 28,575 人であり、愛知県が最も多かった。そのうちの 63.6%がブラジル人であった（文部科学省資料 2008 年）。
- 6 美濃加茂市は、住民 50,598 人中外国人登録者数は 4,880 人であり、内ブラジル人は 2,709 人である（平成 23 年 8 月時点）。知立市の人口は 69,435 人で、外国人登録者 4,136 人中ブラジル人は 2,847 人である（平成 22 年 10 月時点）。
- 7 小内透（2009）では、ブラジル人学校に通う生徒の親たちが、日本滞在が長期化する中で「デカセギ」意識から定住化を見据えた意識へと一部変化させていると紹介している。日本社会との接触の機会を求めたり、保護者同士のネットワークの構築を模索するなど、日本に生活の足場を築こうとしているが、子どもを公立学校へ通わせている親たちには、この傾向はより強いことが予測される。
- 8 本調査ではインターネットに関する質問項目を設けなかったため、今後の課題としてネット利用における使用言語の現状について調べていきたい。
- 9 2008 年に、ブラジルの日系団体である教育文化連帯学会が三井物産からの資金援助を得て、サンパウロ州教育局との協力のもと「カエルプロジェクト」を開始した。調査では、州立学校を訪問、各校の協力を得てデカセギ帰国子弟やその保護者、教師を集めて聞き取りをするなど

の実態の把握につとめている。2010年からは、サンパウロ市教育局とパートナーシップを提供し、市立学校での調査を開始した。

■参考文献

- 小内透 (2003) 『在日ブラジル人の教育と保育－群馬県太田・大泉地区を事例として』、明石書店。
小内透 (2009) 『在日ブラジル人の教育と保育の変容』 御茶の水書房
佐久間孝正 (2006) 『外国人の子どもの不就学 異文化に開かれた教育とは』 勁草書房。
真田信治、ダニエル・ロング (1992) 「方言とアイデンティティ」 月刊『言語』 Vol.21、No.10、大修館書店。
塚原信行 (2010) 「母語維持をめぐる認識と実践 - ラテン系移民コミュニティと日本社会」『ことばと社会』 12 号、48-77。
Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut (2001) "Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation". California: University of California Press.